

学籍番号：194034 名 前：松木 茜 Akane Matsuki

研 究 室：中村研究室

---

2022 長岡造形大学 美術・工芸学科クラフトデザインコース 卒業研究 I

研究テーマ 「生活の中のあたり前にあるものについて」

---

#### 【研究背景】

大学に入学し、親元を離れ一人暮らしを始めた。今まで縁のなかった料理や洗濯などの家事、生活のためのお金の管理、健康に過ごすための体調管理など、自分自身が生活していくために必要なことを意識して行うようになった。自身で生活を作る立場になったことで、当たり前を送っていた日々の生活を意識する様になり、当たり前にあるものが、当たり前にあることで毎日の生活を送れることができるのだと改めて感じるようになった。

日々の生活の中で当たり前にあること、ものについて、自身を振り返り形にすることで、当たり前にあることがどのようなものとして存在しているのかを研究し、当たり前にあることの大切さを伝えたいと思う。

#### 【研究の進め方】

研究を進める上で、自分自身にとっての当たり前について考えたとき、私は日々の生活を送る中で人とのつながりを大切にしていることに気がついた。家や学校、部活動、アルバイトなど様々な環境の中、家族や友人などの様々な人とのつながりに自分自身の居場所を感じ、安心感を覚えている。「つながり」という言葉から、ただひたすら多くの人とのつながりをもつことではなく、私自身が自然体でいられ、居心地の良さを感じられる人とのつながりを持つことを大切にしている。そこには温かさや、心地よさがあり、人とのつながりに私が求めていることである。そのような人とのつながりが自分自身に影響を与え、自分の居場所となり、日々の生活を当たり前のものとして送ることができている。

現在はインターネットや携帯電話などの普及により、世の中がより便利な環境へと変わっている。しかしそんな環境の中でも、人との直接的な関わりだけに留まらず、ネットを介した間接的な交流を持てる SNS がこれほど世の中に浸透し、手放すことができないのは、人との繋がりが多くの人にとっても生活の中で重要なものとして存在しているのだと考えられる。また、新型コロナウイルスの影響により、外出自粛が要請され、人との直接的な繋

がりを持つことが難しい環境下で、多くの人々が人との交流ができなくなった生活に孤独や寂しさを感じていた。この様なことから、人との繋がり、生活の中で当たり前のものとして存在し、私たちが生活をする上で大きな存在であり続けていると考える。

人との繋がりが居場所になることから、私自身にとって大切な「居場所」について考えたとき、「器」が私自身の居場所と近いものがあると気が付いた。器は、そこに身を置くことができ、支えてくれるものであり、その様な環境の中で私も安心して居座れる居場所である。器は用途や形において様々な種類のものがあるが、中でも特にご飯をよそうお茶碗に着目をした。

お茶碗は、古くから人々の生活にあり、今も昔も変わらずに当たり前にあるものとして存在し、広く私たちの食を支えているものである。お茶碗の形は、口縁から腰にかけての器として機能する部分を高台が支え、器の軸となっている。そして上部の器の部分は、上へ形を広げながら柔らかいカーブでものを優しく受け止めるように作られている。

私にとって、人との繋がりが大切な軸となり、その繋がりが優しく受け止めてくれる居場所となるように、お茶碗の形を作ることで居場所としての「器」。そして様々な色や形をつなぐことができ、私自身の人との繋がりを「ガラス」で表現することで、私自身の当たり前にあるものを形にしていきたいと思う。私は今までのガラスの制作の中で、ガラス同士が溶けて交わり繋がる特性を活かして作品にしていた。特に色ガラスを使用することが多く、色同士が優しく繋がり、ガラスによって生み出される自然な表情を作品にしていく上で大切にしていた。そのため、ガラスを繋げ、形にしていくことで自身の「繋がり」を表現したいと考える。



中間発表時のデザイン

今回の制作において、色ガラスを使用し、溶かして現れる色や形の表現によって人との繋がりを表現し、お茶碗の形を制作したいと思う。私が人との繋がりに大切にしていたことは、居心地や自然体、温かさであったため、優しい色合いを使用し、色の研究も行いながら制作を行う。お茶碗の軸となる高台の部分に繋がりである色ガラスを濃く反映させ、それらが器

の広がりとともに優しく広がっていくことで、自分の居場所として温かく迎えてくれるものを制作の中で研究したいと考える。

お茶碗を制作するにあたって、今まで使用してきたお茶碗の形、寸法などを調べ、毎日の生活で使用しているものを振り返った(画像1)。過去のお茶碗を並べてみると、形は丸く、口縁にかけて緩やかに広がる形のものを使用していたことに気付く。また、お茶碗に鮮やかな色や模様が施されているものが多く、食事が明るくなる様な暖かみのあるものを好んで使用していることが分かった。

更に形を考えるため様々なお茶碗を調べる中で、石川県の旧柳田村で作られていた合鹿碗のお茶碗(画像2)に興味を持った。合鹿碗の成立は不明だが、最も古いもので元禄7年から生産されており、当初は販売用ではなく、柳田村の村民が自家用として柳田地区を中心に限られた地域で生産されていた。自分達のために作ったお茶碗が、長い間当時の形を変えことなく伝承され、日々の生活にあり続けている。私はそのように長い間受け継がれてきた合鹿碗の特徴である、通常のお茶碗よりも非常に高い高台をもつ器の形に着目した。合鹿碗の高台が高く作られている理由としては、机がなかった時代に、床に置いた状態で食事ができるように使用するためだと言われている。高台が大きく作られることで、安定した軸を持ち、上の器の部分を支える合鹿碗の形に、私自身の居場所としてのお茶碗の形との繋がりを感じた。

この様な調査から、今までの生活の中で使用していた自分自身のお茶碗、そして作られた当初の形のまま受け継がれている合鹿碗の双方の形を兼ね合わせてお茶碗を作ることで、自分自身にとっての当たり前にあるものを表現していきたいと考える。

私にとっての居場所としての器は、当たり前前に生活を送る上でなくてはならない、力強く大きな存在である。そのため、お茶碗のサイズを通常のものよりも大きく作ることで自分自身の当たり前にあるものの存在を形にできるのではないかと考える。寸法を決めるにあたり、ガラス工房にある h780 w790.5 d800 の最も大きなサイズの窯を使用し、窯に入れられる極限のサイズで寸法を考え制作を行った。



	①口径	②高台の高さ	③高さ	④高台の幅	⑤口縁の厚み	⑥高台の厚み	⑦高台の深さ	重さ
実家のお茶碗	115	15	50	47	3	2	10	125g
家のお茶碗①	115	10	55	49	1	2	8	158g
家のお茶碗②	109	10	47	42	1	2	9	135g
合鹿碗	137	29	104	76	4-4.5		24	



(画像1) 使用しているお茶碗の比較

(画像2) 合鹿碗

## 【制作過程】



(画像 3)



(画像 4)

スタイロフォームなどで大まかな形を作り（画像 3）、その周りに粘土を貼り付け、木材で制作したゲージを使用し原型を作る（画像 4）。



(画像 5)

石膏を 2 回に分けて粘土原型に流し、プレス型の石膏型を制作する。

始めに高台部分の石膏型を作るため、ガラスを流す際に下から空気が抜けるように、割り箸を数本さして空気穴を作り上から石膏をかける（画像 5）。

使用した耐火石膏の量は約 50kg。

石膏が固まったら、割り箸を抜いて裏返し、粘土とスタイロフォームを取り出す。平らに伸ばした粘土を石膏の内側に貼り付け、お茶碗の見込みの部分を作る。この時、上にかけた石膏が外れるように、粘土が下の原型に張り付かないように軽くつける。



見込みの部分に石膏を流し入れる。  
使用した耐火石膏の量は約 64kg。  
石膏が均等になる様に器の形に沿うように石膏を  
入れていく (画像 6)。

(画像 6)



(画像 7)



(画像 8)



(画像 9)

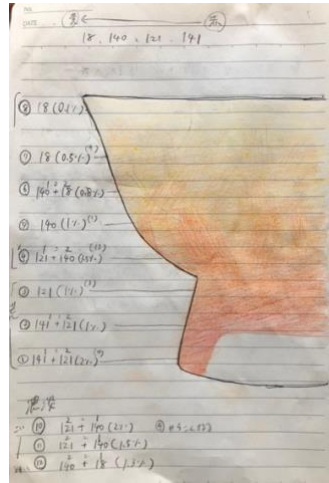
上にかけた石膏を取り出すため、石膏の隙間に薄い板を金槌で叩いて重ねて入れていきながら徐々に高さを出していき、最後に持ち上げて取り出す (画像 7)。

中の粘土を取って軽量を測りガラス量を計算する。今回粘土の重さは高台 5.5kg、上の器の部分 12kg の計 17.5kg。ガラスを多めに見積もって 2 倍で計算し、ガラスの量は 35kg。計算した分のガラスを配色して詰め込み、更に詰められる量のガラスを入れたため、ガラスの重さは計 54.8kg。

リフターにガラスを詰めた石膏を乗せて釜の高さまで上げ、非常に重いので協力してもらいながら少しずつ回して押し込み釜に入れる (画像 8)。ガラスが溶けて落ちるように石膏の上に煉瓦を置いてプログラムを行い焼成する (画像 9)。

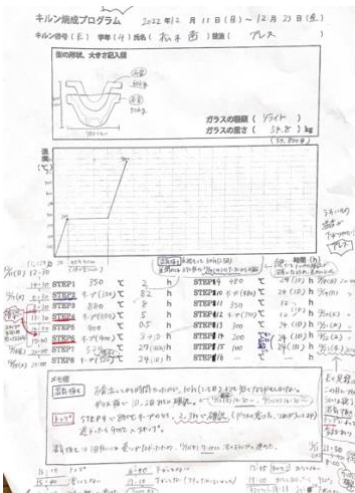


▽色実験 (画像 10)

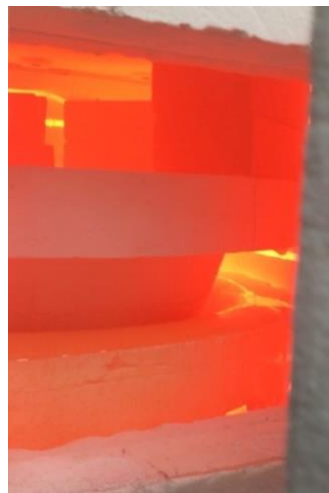


▽色ガラスの配色 (画像 11)

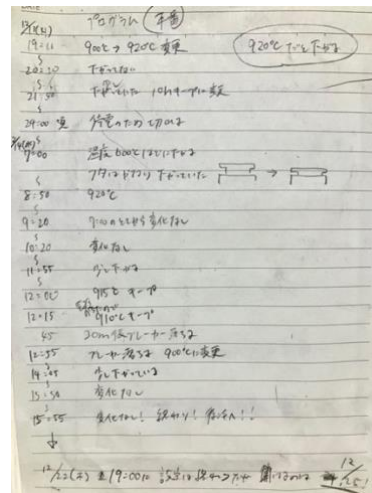
今回の作品では温かい色合いがやさしく広がるようにイメージしているため、グラデーションの中に濃淡をつくり、色同士が幅広く繋がるように配色を考えた。色パウダーの種類や割合、ガラスの細かさによる色の変化を調節した実験 (画像 10) を基に、作品の配色を行う (画像 11)。



▽プログラム表 (画像 12)



▽トップの釜の中 (画像 13)



▽トップの確認メモ (画像 14)

トップの温度のままガラスの流れ具合を1時間~2時間おきに釜を開いて確認する (画像 13)。今回、釜の極限のサイズまで石膏型を作ったため、電熱線に溶けたガラスが触れて漏電し、高い温度ではブレーカーが落ちてしまったため最終的に900°Cでキープを行った。そのためプログラムの時点では、トップを880°C~900°C約5時間キープに設定していたが、実際には880°C2時間キープ、ガラスが溶けないため温度を上げて900°C2時間キープ、更に温度を上げて920°Cに2時間45分キープを行い、大学が閉館時までガラスが下がらなかったため10時間キープに変更し、翌日確認をするとブレーカーが夜中に落ちて電源が切れたため釜の温度は600°Cほどに下がっていたが、石膏型のプレス部分が3cm

ほどの隙間を空けて下に下がっていたためガラスが溶けていたことを確認できた。そこから再度石膏型が閉まりきるように 920°Cに温度を上げ、ブレーカーが落ちたため 900°Cに変更しながら計7時間キープを行い、石膏型が2cmほどの隙間を空けたままなかなか下に下がらないことを確認し徐冷へと進める（画像14）。



（画像15）



（画像16）



（画像17）

1週間かけて徐冷を行った後、石膏を取りながら窯から取り出す。石膏の爪が焼成時にずれ、引っかかってしまった部分があったため完全に閉まりきっていないことが分かった（画像15）。石膏が焼成時に割れ、中のガラスが溢れている部分があるため削って加工を行う（画像16-17）。



（画像18）



（画像19）

ガラスが溢れて足りない部分を、新たにガラスで作って接着する。粘土で形を作り（画像18）、石膏を流してガラスを詰める。この時流すガラスは、加工時に削ったバリの部分のガラスを砕いたものも扱い再利用する（画像19）。



（画像20）



（画像21）



（画像22）

粘土の形が崩れないように丁寧に取り出し、石膏型をとりガラスを詰めて焼成する（画像

20-21)。耐火石膏は 8kg、ガラスは 4450g 使用した。ガラスの量を多めに計算していたため、余分な部分のガラスを削り（画像 22）、ガラス用のボンドで器に接着する。



(画像 23)



(画像 24)



(画像 25)

接着した部分の隙間をパテで埋め（画像 23）、ウォーターサンダーで器の形を整えながら削り磨き上げる（画像 24）。接着した境目や、ガラスのひび割れの部分に金澄を貼る（画像 25）。

#### 【まとめ】

研究当初は、大きなものを制作することの難しさや、制作工程が長く最後まで形が分からない不安に、作品を通して自分自身の居場所としてのお茶碗を形にできるのか疑問を抱いていた。しかし長い準備を経てやっとの思いで窯から作品を取り出し形にした時、そこにあった形は自分自身が想像していたものよりも強く大きくそこに存在し、私自身のあたり前にあるものがどれほど大きな存在であるのか実感することができた。

また、今までの制作では、今回の様にガラスが足りない時はもう一度窯の中で焼成することで自然と繋げていたが、今回は私が意志を持って自らの手でガラスに繋いだ。そこには、人とのつながりが自分自身の居場所でありながら、自分の意志も持っていきたいという思いが込められていると感じている。お茶碗のガラスの素材とは異なる、金箔の細々とした、しかし強い輝きは、自らの意志の光としてそこに継がれている。

今回の制作の中で、自分一人では作業を進めることができない場面が何度もあり、その都度多くの人達の手を借りたおかげで作品を形にしていくことができた。今までの制作は一人で行うことがほとんどであったため、協力を頼みながら制作を行うなかで、私自身が多くの人達に支えられていることを改めて感じるようになった。

生活を送る中であたり前あるものは、目には見えず意識することがないものかもしれない。しかしそれは自身にとってかけがえのない大きな存在として日々の生活の中にあり、強くやさしく私自身を支えるものであることを、制作を経て気づくことができた。